

対象群の特性によって限定される。対象群に含まれる事例が個々に多様な特性をもっている場合には、事例から得られたひきこもり関連の心理的要因から個別の特性の影響を排除できない。一方、対象群の背景や特性に共通部分が多い場合には、その特性との関係から得られた心理的要因についての理解をより深めることができる。

本研究においては対象群を大学生に限定しており、対象がひきこもり全体の中の一部であり偏りは避けられない。しかし一方で対象群の心理的背景には一定の共通性が認められる。大学生は精神発達論的には青年期後期に該当し、青年期後期の心理的課題が大学生の心理の主要なテーマとなっている。大学生の生活や心理的課題は共通性をもっており、ある程度把握可能である。対象群がもつこれらの共通性を前提にして、ひきこもりの形成の心理的要因についての理解を深めることができると考えられる。

昨年度はひきこもりに関連する心理的要因について検討した。本年度は二つの視点からさらに青年期後期のひきこもりについて検討を加えた。一つはひきこもりと精神医学的診断の問題である。「ひきこもり」の援助システムの中で、精神科医療がどのような役割を果たすべきか、医療が引き受けるべき役割と医療の限界の明確化が必要であり、そのためには精神医学的診断についての知見の蓄積が必要である。ひきこもりにおける精神医学的診断について検討を加えた。

第2に、ひきこもりの発現に関与する精神力動的理解を深めるための検討である。昨年の調査は発症に関連する心理的要因について検討したが、さらにこれらの要因が力動的な視点からどのように理解することができるのか、各要因を列挙するだけでなく、要因を統合的に理解する視点を求めることを試みた。青年のひきこもりを動かす力動的概念の調査はひきこもりの理解を深め支援活動に資すると考えられる。

C. 対象と方法

1. 対象

ひきこもり概念は社会的に見た状態像を指し示しているに過ぎず、ひきこもり事例が心理的に共通の要素を持っていることを前提としているわけではない。心理的要因について検討する場合には、調査対象となった事例群の属性を明確にして、その属性をもつひきこもり群に限定して心理的要因を論じる必要がある。

本研究では二つの属性を持っているひきこもり事例を対象として心理的要因について検討した。一つは発達論的視点における特性である。ひきこもりの発現時期は事例ごとに異なっており、思春期に事例化するもの、大学入学後に事例化するもの、あるいは就職後に事例化するものなど多様である。事例の年代差から生じる違いを無視して、ひきこもりとして一括して心理を検討し対応を論じることは適切ではない。ひきこもりの形成に関与する心理的要因は年代ごとに異なっていると考えられ、ひきこもりの形成に関与する心理的問題を年代別に検討することはひきこもりの支援・対応を検討する際に重要であると考えられる。本研究では発達論的分類で青年期後期に属する若者に焦点を当て、対象を青年期後期に限定して、青年期後期の心理を前提にしてひきこもりについて検討した。

第2に、ひきこもりへの早期対応の問題に注目した。ひきこもりの長期化を防ぐためには、早期対応が必要と考えられるが、ひきこもりの発生初期の状態については十分に検討されているとは言えない。従来ひきこもりに関する研究は長期化した重症例に比重がおかれて来た。その理由の一つは、ひきこもりとして認定されるためには一定期間同じ状態が続いているという要件が必要であったことがあげられる。通常6ヶ月以上継続していることがひきこもりの要件として挙げられる場合が多い。それに加えて、ひきこもりの性質上早期に相談機関を訪れる事例が少ないことも挙げられる。したがって

相談機関で取り扱う事例には二次的に付加された心理要因を併せ持つ重症例が多い。ひきこもりの軽症例については、今後検討が必要と考えられる。

本研究では、平成14年度から平成16年度までの3年間にA大学学生相談室に来談した学生の中で、大学を休んでいることが主要な相談内容の一つとなっている者39名を対象とした。

(表1)

表1 対象	
人数	39 (名)
男子	30 (名)
女子	9 (名)
平均年齢	22.1 (才)
院生	9 (名)
学部生	30 (名)
期間	8.0 (ヶ月)

6ヶ月未満の短期例はひきこもりから除外する考え方もあるが、本研究ではひきこもり類似の問題をもつ軽症事例もひきこもりの不整形とみなすことができると考えて研究の対象にした。したがって学校を休んだ期間には条件を設けなかった。

本研究における対象群は大学生で相談機関を訪れた事例に限定している。相談機関に来ない事例は省かれているので、大学生の「ひきこもり」事例の中の一部を代表しているに過ぎない。したがって対象には偏りがあるといわねばならない。本研究の対象は「相談室を訪れた大学生の『ひきこもり』事例」という条件に限定された一群にすぎないとも言えるが、この対象群の持つ心理的特徴としては青年期後期の心理的課題⁶⁾であり、大学生の心理的背景に共通する主要なテーマとなっており、ひきこもりの形成の心理的要因と青年期後期の特徴との関連について検討することができると考えられる。

方法

初年度と同じく対象を以下の方法で3群に分

けて検討した。(表2)

各事例の「社会活動」、「対人関係」、「行動範囲」の3項目について機能障害の程度に応じて3段階に分類し、それぞれに重い方から3点、2点、1点の得点を与えた。3項目の得点を合計し、対象を「ひきこもり群」と「中度群」「軽度群」の3群に分けた。

各項目の得点の判定基準は以下の通りである。

「社会活動」

3点：登校、サークル、アルバイト等の活動を全くしていない。自宅・下宿にいて、大学からの呼び出しも応じない

2点：登校、サークル、アルバイトはしていないが大学からの呼び出しには応じる、

1点：登校はしないが、サークル活動は続けている、あるいはアルバイトだけは続けている。

「対人関係」

3点：家族以外の対人関係はない。大学からの連絡にも答えない。自宅を訪問した大学関係者、友人にも会わない。

2点：家族以外の対人関係はないが、下宿・自宅を訪問した大学関係者、友人には会う。大学や友人からの電話の連絡には応じる。

1点：時には友人に会う

「行動範囲」

3点：自宅から出ない、下宿の場合は必要な買い物時のみ外出する。

2点：たまに外出する。

1点：自由に外出する

3項目の合計点が7点以上の重度群を「ひきこもり群」とし、6点以下4点以上を「中度群」、3点以下を「軽度群」とし、以下の点について検討した。

面接記録を検討し、各対象についてDSM-IV診断に該当するかどうかを検討した。

次に、対象の自我理想について検討を加えた。自我理想は自己に対してあるべき理想や規範を示す働きとしてフロイトが提出した概念である。自我理想は青年にとるべき行動の方向性

や指針を与える働きであり、青年期における意義は大きい。自我理想の期待に応えられない、あるいは期待を無視すると劣等感を生じる¹⁷⁾。各事例の自我理想の様態について面接の記録、

面接時の印象から判定し、類似の特徴を示す群をまとめて類型化を試み各類型について分析し、青年期ひきこもりの心理について検討した。

表2 重症度判定基準

重 度 3点	中 度 2点	軽 度 1点
	社 会 活 動	
登校しない、大学からの呼び出しには応じない	登校しない、大学からの呼び出しには応じる、	登校しないがバイト、サークル活動あり、又は間歇登校
	対 人 関 係	
家族外の対人関係なし 訪れた人にも会わない、 連絡拒否	来た人には会う、 連絡拒否はしない	友人に会う
	行 動 範 囲	
自宅から出ない 下宿者 ：必要な買い物のみ	たまに外出	自由に外出

表3 3群の構成員について

	ひきこもり群	中度群	軽度群
人 数 (名)	13	12	14
男 子	12	8	10
女 子	1	4	4
平均年齢 (才)	22.6	20.0	23.3
院 生 (名)	2	2	5
学 部 生	11	10	9
期 間 (ヶ月)	6.8	9.2	8.3

結果 (表4)

表4に全39例のDSM-IVに準拠した診断を示した。診断がついた事例が21例(1例は重複診断)、DSM-IV診断に該当しない事例が18例であった。診断がついた21例は、回避性パーソナリティ障害4例、気分障害3例、社会恐怖3例、摂食障害2例、シゾイドパーソナリティ障害1例、適応障害9例であった。

診断がついた21例中、医療機関を受診した事例は5例(気分障害2例、摂食障害2例、適応障害1例)であり約25%に過ぎなかった。

重症度別に見ると、「ひきこもり群」13例中、

診断がついた事例は9例(69%)、診断なし4例、「中度群」(13例)では診断がついた事例は12例(重複診断1例)(85%)、診断なし2例、「軽度群」(13例)では診断がついた事例は1例(7.7%)、診断なし12例であった。

「ひきこもり群」ではパーソナリティ障害2例、社会恐怖1例、適応障害6例であった。特に適応障害が多いのが特徴的であった。一方「中等度群」ではパーソナリティ障害3例、気分障害、社会恐怖、摂食障害がそれぞれ2例、適応障害3例であった。「軽度群」で診断がついた事例は気分障害1例のみであった。

表4

DSM-IV	ひきこもり群 N=13	中等度群 N=13	軽度群 N=13	計
回避性パーソナリティ障害	1	3	0	4
気分障害	0	2	1	3
社会恐怖	1	2	0	3
摂食障害	0	2	0	2
シゾイドパーソナリティ障害	1	0	0	1
適応障害	6	3	0	9
計	9	12	1	22

「ひきこもり群」で診断のついた9例について、ひきこもりの始まった時期と病状が出現した時期について検討したところ、9例のすべてにおいてひきこもりと病状は同時進行的に出現していた。何らかの病状が先行してあとからひきこもりが出現した事例は認められなかった。

表6

	ひきこもり群	中等度群	軽度群	計
未定型	5	5	12	22
破綻型	4	5	1	10
未成熟型	4	3	0	7
計	13	13	13	39

各事例の自我理想の様態について面接の記録、面接時の印象から判定し、「未定型」(明確な自我理想がなく、目標を持って困難を乗り越えることができない)、「破綻型」(熱心に追求してきた自我理想が破綻した状態)、「未成熟

型」(自我理想を担う主体の弱さ)に3分することができた。(表6)

「未定型」22例、「破綻型」10例、「未成熟型」7例であった。各群における各型の事例数は「ひきこもり群」では「未定型」5例、「破綻型」4例、「未成熟型」4例、「中等度群」では「未定型」5例、「破綻型」5例、「未成熟型」3例、「軽度群」では「未定型」12例、「破綻型」1例、「未成熟型」0例であった。軽度群はほとんど「未定型」であった。「破綻型」と「未成熟型」はほとんどが「ひきこもり群」か「中等度群」であった。

事例

破綻型1 4年生女子(中等度群)

勉強さえできればいいという考えを親から押し付けられて来た。受験勉強中は、親から勉強を強要され、自分もその考えを受け入れていた。何のために勉強しているのかは考えず、視野が狭いままに、ただ与えられた勉強を頑張った。焦りすぎて周囲が見えなかった。じっとしていると罪悪感を感じた。時間を節約しようとして、無意味に忙しくしていた。大学入学までは挫折なしでできたが、入学後に挫折を体験した。

入学後1-2年は忙しくしていたので、考えるひまがなかった。3年になり、クラブで責任ある立場に立ってから、勝つことを過度に意識した。自分から高い目標を求めて自分の首をしめる結果になった。3年の5月から摂食障害になり体重が15kg減少した。うつ状態が強くなり、自分のやっていることに虚しさを感じた。親に進められた自分の進路にも疑問が生じた。自分の背後にブラックホールがあってブラックホールの入り口にいるような感じがして、何もしていないと、ブラックホールに吸い込まれそうに感じた。全部が虚しく感じられた。

3年になり強い抑うつ状態が出現し6ヶ月学校を休んで下宿に閉じこもっていた。自殺念慮、拒食が出現した。いままで家の価値観に縛り付けられていた。学生相談室でのカウンセリング

をうけながら、趣味に唯一の心の慰めを見出すことで、徐々に心の平穏を取り戻し、自分なりの心の整理がついて2年後に大学に復帰することができた。

破綻型2 大学院生 (ひきこもり群)

高校ではクラブ活動をせず、すぐ家に帰って勉強ばかりしていた。高校のとき難関の大学を目指した。大学に入学後、ふわっとなって4年間過ごした。学部を卒業するときに、一度ひきこもりになった。研究室で挨拶をしない、片付けないなど社会性が未熟。友人はいない。今回は修士論文ができなくて、閉じこもり、布団で寝ていた。実験の結果が出なくても、できると言ってしまった。

周りと自分を比べてしまう。後輩の方が実験ができる。ちょっと失敗してめげるのが早い。つらくなったら逃げてしまう。ひきこもっているのを心配した学生や教官が電話をしても出ない。手紙を出しても読まない。教官が訪ねていっても会おうとしない。就職試験は受けていない。就職が決まってないのが不安。就職のビジョンがなく不安。自信があまりない。何かをやりたいという気持ちはあるが、何かがよく分からない。就職も他の人は決まって、後輩にも抜かれる。取り残される。妙なプライドがあって、どんなことでも5割以上の確立がないと怖い。何が一番辛いかといって、自分はたいしたことないのに、周りの人がそう思わない。

未成熟型1 (ひきこもり群)

3年の初めより、学校から足が遠くなった。2年まで単位は取れている。授業は出ていない。下宿で過ごしている。たまに町に出たりする。盆正月は帰省。家族の目には普通に見えた。ひきこもったきっかけは実験のレポートが書けなくて、登校できなくなったことである。友人と会うこともなくなった。不安はあった。読書、インターネット、ゲームをしている。家族からの電話にも出ない。専門についてそれほど強い

興味はないが、専門科目が嫌という訳でもない。先のことは何も考えられなかった。焦りはなかった。どうなるかなと、具体的には何も考えてない。就職するか大学院に進むか、どちらもまだ考えていない。外出は買い物程度、テレビゲームをして過ごしている。

面接時も淡々とした口調で、特に不安や葛藤は訴えない。自分の将来像について具体的なイメージは持っていない。自ら進路を切り開く意思は感じられず、その時の状況に受動的に対応しているだけであった。社会参加がまだ自分の問題としてとらえられていなかった。

未成熟型2 1年 (ひきこもり群)

1年の夏ごろから不登校が始まる。大学生活になじめない。授業はおもしろくない。友人はいない。家に居て外出はほとんどしない。将来のことは考えられない。単位については今はどうでもいいと。家人が何を聞いても分からないと言う。高校は進学校で、勉強中心の生活だった。

未定型1 2年 (ひきこもり群)

2年の夏休み明けの試験を放棄した。それから半年大学を休んだ。復学し1年間登校した後、次の年夏休み明けから1年半休んだ。パソコンをしたり読書したりしていた。たまに外出したが友人は避けた。あまり外出する気にならなかった。やる気が出ず、目標がなかった。外に対する活動ができなかった。気持ちが向かないのでしり込みする。生活習慣を崩さないようにしている。大学への復帰が心配。復帰してもつぶれそう。もう少し休学して他人と関わるようなことをして、自信をつけたい。人間関係の自信がない。自分から他人と関わるのは苦手。周囲の反応が怖くて閉じこもる。方向性を探っている。

未定型2 4年生 (中等度群)

研究室に行ったり行かなかったり、勉強が手

につかない、論文を読むと拒否反応が起こる。横になってテレビを見ている。勉強で分からない内容に遭遇すると集中が途切れる。専門科目には興味を惹かれない、分からなくてもいいという意識、就職活動が迫っている、自分は何をしたらいいのかわからない。去年は9月から登

校しなくなった。義務がないときは楽。僕がいるから世界は成り立つと思う。自分が一番という頑固な面を持っている。就職して会話が円滑にできるか、大人の関係に対して不安がある。興味を共有できない他人とどう付き合うかが問題だと思う。

	症例	性別	学年	期間 M	DSM-IV	自我理想	まとめ
ひきこもり群	1	m	2	3	—	未決定	やる気がない。興味があることがない。将来については考えていない、授業に出てもボーっとしている。専門に興味はない、先のことを考えると不安になる。
	2	m		6	適応障害	未決定	、不安、自信がない、就職も大学に残るのもいや。
	3	m	2	12	退行	未成熟型	大学生活に馴染めない、授業に興味を持ってない、友人少ない、将来不確定 成績低下にショックを受ける
	4	m	2	2	社会恐怖	未決定	意欲低下、自信喪失、目標喪失。人間関係に自信がない。方向性を探る
	5	m	M 2	6	適応障害	破綻型	論文がうまくできない、友人がいない、将来の目標が不明、直ぐに落ち込む、プライドが高い目的意識が乏しい
	6	f	3	6	適応障害	破綻型	勉強が分からない、成績がショック、勉強が苦手、周囲の人と合わない
	7	m	4	8	適応障害	未成熟型	進路は今の専門でいくしかない、家庭内葛藤
	8	m	1	12	シゾイド パーソナリティ障害	未成熟型	自己主張が乏しい、受身、大学生活に適応できない、何をしたいかわからない。
	9	m	4	2	適応障害	未決定	大学院入試に落ちてショック
	10	m	5	7	適応障害	破綻型	勉強の行き詰まり、研究室の対人関係が苦手、きっちりやりたい、大学の自由が苦手、

11	m	1	4	—	未決定	将来の目標が不明、やる気低下、授業に興味無し
12	m	D3	8	—	破綻型	真面目、友人がいない、研究がうまくいっていない、学会で自信を失った
13	m	4	12	回避性パーソナリティ障害	未成熟型	勉強が苦手、ゲームをやっている、将来のことは考えていない、

中等 度群	14	f	4	36	摂食障害	破綻型	成績のみを重視した生き方の破綻
	15	m	4	17	適応障害	破綻型	研究がうまくいかない
	16	m	2	16	気分調節性障害	未成熟型	通学疲労 気力低下 体調不良 家を出るが登校しない
	17	m	2	6	回避性パーソナリティ障害	破綻型	挫折しらず、勉強についていけず、躓いた、自分ほだめ、死ぬしかない
	18	f	1	1	摂食障害+回避性パーソナリティ障害	未成熟型	自宅に居ると安心、社会に出るのが怖い、休んでいると楽
	19	m	4	6	気分障害	未定型	勉強が分からない、手につかない 専攻興味喪失 将来未決定
	20	m	1	12	社会恐怖	破綻型	成績至上主義、過去に黄金時代
	21	f	4	6	適応障害	未決定	進路変更失敗、意欲低下、専門の勉強が難解
	22	m	4	12	社会恐怖	破綻型	勉強の意欲なし、成績低下ショック、親子の葛藤
	23	f	M2	1	適応障害	未決定	勉強やる気がない。院の勉強難しい、卒業したい
24	m	2	1	回避性パーソナリティ障害	未成熟型	友人なし、家の居心地はよい、人付き合いが悩み、大学生活は負担	

	25	m	M1	1	—	未決定	研究の気力がなくなった、研究テーマが面白くない、研究に向いてないのか、他にやりたいこともない、早く就職したい、
	26	f	4	5	—	未決定	サークル、アルバイトはしている、大学を一度は辞めるつもりになった
軽度群	27	m	M2	0	大学不 適応	未決定	就職が決まったがやる気低下、自信がない
	28	m	3	36	モラト リ アム	未決定	通学がに疲れる、授業が面白くない、将来の目標ない、自信がない、卒業は難しい、働くことも考えた。
	29	m	22	た ま に	—	未決定	研究に興味がない、他の道を探す
	30	m	M2	2	—	未決定	研究の頑張りが出ない、足が研究室に向かない、早く卒業、就職したい、
	31	m	M1	1	—	未決定	大学以外の活動は熱心、発表が負担、気力がわかない、ゲーム、再登校
	32	m	4	3	—	未決定	勉強をやる気がない、勉強したくない、
	33	m	3	2	—	未決定	学校が合わない、専門は理解できてない
	34	m	2	2	—	未決定	やる気が出ない。分からない授業がある。学校へ行くのがつらい
	35	m	3	5	—	未決定	やる気がなくなって、学校はどうでもよくなった、休学しリフレッシュした。
	36	f	5	30	—	未決定	朝起きられず、学校を休む、転学を考えている
	37	m	2	1	—	破綻型	勉強のやり方が分からない、授業に遅刻する、失敗を恐れる
	38	m	D1	24	気分障 害	未決定	研究がうまくいかない、やる気が出ない、
39	f	3	0	—	未決定	専攻(将来設計)に興味がない	

考 察

1. DSM-IVによる診断について

「ひきこもり」群でDSM-IVによる診断がついた例は69%、約7割であった。これらの事例で見られた精神症状はひきこもりの出現と時間的には同じころであり、同時並行的に出現していたと考えられた。ひきこもりに先行して精神症状が出現していた場合には、疾患が原因となって2次的に「ひきこもり」が生じたとも理解できる。そのような事例においては問題の中心は精神疾患の出現にあり、「ひきこもり」が精神疾患に伴う2次的な症状である可能性も考える必要がある。

今回の調査で、「ひきこもり」発症と疾患発症との時間的な順序を見ると、疾患が先行し、後から「ひきこもり」が生じた例は認められなかった。「ひきこもり」と症状は並行して同時的に生じていた。これらの事例については、「ひきこもり」と精神症状は密接な関連をもっていることが示されている。

「ひきこもり」と精神症状が同時進行的に出現している事例に限って言えば、両者ともに同じ要因を背景にして生じたものである可能性を示唆している。

本調査においては「ひきこもり」(13例)に該当し、かつ精神疾患の診断がつく事例(9例)が約7割認められた。

ひきこもり群では人格障害が2例あり、回避性パーソナリティ障害1例、シゾイドパーソナリティ障害1例であった。両者共に対人関係や社会的状況を避ける傾向を持つパーソナリティ障害であった。回避性人格障害は、社会的にひきこもっている一群の人たちの特徴を記述するために設けられた診断であり⁵⁾親密な人間関係を望んでいるが恐れている。失敗したときの屈辱感や拒絶されたときの苦痛を回避しようとしている。対人関係や社会的場面を恐れ、その理由が自分が否定されたり評価されないことへの不安である。このような定義をもつ回避性パーソナリティ障害はかなり多くの「ひき

こもり」例に該当する診断であると考えられる。

「ひきこもり群」13例中、診断がついた事例は9例(69%)、診断なし4例、診断がついた9例中、パーソナリティ障害2例、社会恐怖1例、適応障害6例であった。今回の結果はひきこもり群の7割に精神医学的診断をつけることができた。

今回の調査では、ひきこもり群の中に特に適応障害の診断が多かった。次に適応障害について考察する。

2. 適応障害について

ひきこもり群の診断名の中では適応障害が5名で最も多かった。明確に認められるストレス因子に反応して生じるのが適応障害である。きっかけとなる出来事に引き続いて3ヶ月以内に情緒面あるいは行動面の症状が現れ、その程度がストレスから予想されるよりはるかに強い苦痛であったり、あるいは社会的(学業上の)機能の著しい障害である場合にDSM-IVの診断基準では適応障害と診断される。適応障害の診断には、DSM-IVの他のI軸障害の基準を満たしていないという要件が必要である。

今回適応障害と診断した事例には、社会恐怖の診断に該当するような対人関係における過度の不安や怯えや社会状況に対する固定した過度の不安もなく、また意欲の低下や憂鬱な気分、不眠、集中力低下などの気分障害の症状も認められなかった。

適応障害に該当した事例は、発端となる明確なストレスがあり、その後社会的機能の著しい障害(ひきこもり)が始まっており、DSM-IVの適応障害の診断に該当した。

適応障害(DSM-IV)の診断は他の診断に該当するほどの明確な症状形成がない症例を入れておくための診断カテゴリーであり、症状(現象)による定義を採用しているDSMにおいては異色の診断基準をもっている。井上適応障害は、明確な症状論が不在であり、症状による定義に代えて、成因論的な定義を採用している。

「ひきこもり」群の適応障害5例は、大学院入学試験、学会発表、修士論文、研究など本人の生活の中で重要な問題に直面して期待した成果が出せなかったことがきっかけとなってひきこもり（社会的機能の著しい障害）が生じていた。これらの事例につけられる適応障害の診断は、疾病というよりは不適応によりストレスが生じて社会的機能が低下している状態と考える方が適切かもしれない。適応障害は多くの「ひきこもり」に該当する可能性をもつ診断名である。

適応障害は医学的診断ではあるが、精神保健領域にも重なる内容をもっている⁷⁾。

DSMやICDなどの現在世界で広く使用されている操作的診断基準は、多くの精神的な問題を中に取り込んでいる¹⁾。その中には、明確な病気とは言えないが、健康でもないグレイゾーンにある不健康も含んでいる。その理由は、これらの診断大系が臨床に用いることを主眼として生まれたものではなく、精神の健康に関する問題を統計的に把握しようとする目的をもっているからである。すなわち精神の健康に関係のある問題全体に対応できるように、DSM-IVによる診断は狭義の疾患だけでなく、精神保健あるいはメンタルヘルス的な問題をも含んでいる。その代表例が適応障害の診断である。この診断名だけでは、症状や病像について具体的に思い浮かべることができない。DSM-IVによる適応障害に該当するひきこもり事例は、必ずしも医療の対象とは言えず、DSM-IVによって診断がついても医療が優先的に治療すべきであると結論付けることはできないことを示す一例である。

3. 青年期の発達課題からみたひきこもりの状態

1) 青年と自我理想

ひきこもりは、本人の主體的なかわりによる年齢相応の社会的な営為が行われず、社会参加のための活動が停滞し、社会的不適応が生じ

ている状態である。「ひきこもり」概念が示しているのは青年の発達課題達成過程の停滞である。具体的には職業アイデンティティを獲得し、社会の中で一人前の個人として独立するための活動が停止していることである。本人は将来への発展の道を閉ざされた状態にあり、その状態に悩みながらも抜け出す道を見つけることができず、目的を見失っている。「ひきこもり」は本人及び家族に強い精神的負担をもたらし、「ひきこもり」が長期化すると、「ひきこもり」からの脱出はより困難になる。ひきこもっている本人に期待されるのは社会的課題の達成に向けての努力を再開することであり、援助はその過程にきっかけをあたえることから始まり、それに続く過程を支えることが求められている。

ひきこもりについて青年の発達課題の達成という観点から理解しようとするときに有用な概念と考えられる「自我理想」を通してひきこもり問題を整理してみたい。

自我理想は、自分がかくあるべきであるとして青年を導く理想である。それは個人的な願望であるだけでなく、社会的にも認められる価値を持つものである。また「自我理想」は頭の中で考える観念的な目標ではない。自分の人生の中で必然的に生じた価値であり、それを達成することが満足感や達成感をもたらし、自信や自尊心など肯定的感情を生み出す基準となっている。自我理想は源を辿れば自己愛に発している。自我理想は源を辿れば自己愛に発している。青年の行動を支える精神的支柱であり、青年の精神活動を深いところで左右している。

学生は就職活動の中で、会社（社会）が要求する人物像に自分を近づけようとする。社会参加を果たすために、学生の自我理想は社会からの要求を取り入れたものに変化せざるをえない。就職という目標を達成する過程で、学生は社会の価値体系を受容し社会適応を果たしていく。自立への欲求をもち、社会参加に向かって主體的に行動していくことによって青年期の社会参加の課題は達成される。

自我理想は青年に自分の生き方の基準を与え、同時に青年が自己愛の満足を計る物差しでもある。自我理想を目指し、理想の実現に向かっているとき、青年は自分に自信を持つことができる。一方、自分が自我理想から外れている、はるかに遠いところにいると感じるとき、青年は自信をもつことができない。自分への満足感がなく、引け目を感じ、自分が劣っているように見え、目標を失い意欲が低下し、将来への歩みが停滞する。

自我理想は個人の「自己愛」を基盤にしながらも、一方では社会的に容認された「アイデンティティ」へと個人を導く役割を果たしている¹³⁾。自我理想はそれに向かって努力をしようという意欲を掻き立てられる目標であり、その目標が社会的な価値をもち社会に受け入れられ、その価値に向かうことが適応的であるものである。「自我理想」は個人の「自己愛」と個人に対する「社会的要請」の双方に対応する理想である。

「ひきこもり」が示している問題は「社会」と「個人」との関係という「社会的な問題」でもあり、同時に個人の「意欲」や「目的意識」、「自己愛の満足・傷つき」といった「個人の内的な領域」にかかわる問題でもある。この両者を統合する概念が自我理想である。小此木は自己愛の充足の破綻が無気力、ひきこもりの状態を作り出すと指摘している。青年期後期の発達課題は自己愛の充足と社会的な価値の獲得を一致させることである。この年代の社会的価値獲得の破綻は自己愛充足の破綻にも繋がり、意欲喪失、目標喪失を引き起こし、自己コントロールの喪失をもたらすことになる。これを免れるためには、新たな自我理想を獲得し、次の目標に向かって自己を統合していくことが必要である。「ひきこもり」について自我理想という視点から検討することは「ひきこもり」についての理解を深め「ひきこもり」への対応の指針になると考えられる。

本調査では自我理想のあり方という視点か

ら事例を検討した結果、3類型に分けることができた。

2) 自我理想の3型

1. 破綻型

この群に属する学生は、勉強することを最大の目標として、大学入学までの時期を過ごしてきた。勉強を最優先する価値観の下で、禁欲的な努力を続けた。勉強以外の遊びや社会的活動は犠牲にして、勉強に打ち込んできた。そのために同年代の仲間との交流や社会的な体験は不十分である場合が多い。「研究室での社会性が著しく欠けている」、「挨拶をしない」等指摘された事例もある。人間関係の体験や学校外の社会体験に乏しく、社会人になるための経験が少ない。勉強だけが視野にあり、その先で社会人になるという自覚に乏しかった。青年期後の課題である社会参加への準備は非常に不十分な状態であったが、勉強の成果が出ている間は自己愛の満足を得て自信を持っていた。

大学入学後、勉強が思うように進まず、期待通りの成績を得ることができなくなり、自己愛の満足を得られなくなると、一挙に自信が失われる。毎日授業に出ていた学生が、テストの成績が悪かったことにショックを受け登校しなくなった事例、あるいは実験がうまくいかないという理由で休み始める事例などが認められた。

良い成績をとることを前提として描かれていた将来像が手の届かないものになってしまい、将来への道が閉ざされてしまったと考えてしまう。クラブ活動やアルバイトなどをせず、友人がない学生は大学内で孤立する。今まで自分を支えてきた自我理想からかけ離れた状態になっていると感じて、今までの自我理想が自分にとっての目標にはならなくなってしまう。受験勉強を支えてきた自我理想に基づいた人生設計が破綻してしまう。

勉強の価値が大きかった大学生ほど、学業における挫折のショックは大きく、自分が追及し

てきた理想が破綻した状況に追い込まれる。実現不能あるいは有効性がなくなった自我理想に変わる次の自我理想の形成は容易には進行しない。自我理想の空白状態が生じる。追求すべき理想を失った青年は目標を定めることができず、自己価値形成のための活動ができなくなる。「自己価値の喪失」状態に陥っている。次の目標のなさは内的には無力感、意欲低下、やる気のなさを生じ、外的には社会的機能の低下そして「ひきこもり」を引き起こす。

事例1は、勉強だけをしていればいい、勉強がすべてであるという父親の考えに従って受験勉強を行ってきた。自分が達成すべき目標に対しては強迫的に努力し、じっとしていると罪悪感を感じたという。勉強以外の欲求はすべて否定して受験勉強に集中した。学歴への徹底したこだわりをもち、そのためには他のすべてを犠牲にしてきた。その結果、生活の中にゆとりが無くなり、他の価値観を取り入れる余地が全くなかった。大学入学後、クラブ活動においても、高い目標を掲げて努力するという態度を貫いていたが、常に自分に努力を強いるやり方に限界が来た。

父親から与えられた自我理想に向かって努力する生き方が破綻し、勉強の意味に対する疑問が生じて何も手につかなくなった。彼女が体験したのは、価値の空白であり、自分がやっていることの意味、そして生きていくことの意味にまで疑問が生じた。彼女はあたかもブラックホールの淵に立っているかのような空虚感を感じたと言う。何年もの間自分の生活を律してきた自我理想を喪失した彼女は人生設計の破綻に直面せざるを得なかった。それは対人不信、自己不信、自己肯定感のなさ、生への疑問にまで及び、そこから立ち直るために2年の期日を要した。

破綻型の事例2も大学入学までは勉強に関して自信を持っていた。面接時にも高いプライドを持っている様子が伺えた。彼は高い自我理想に縛られていて、論文ができない、実験がう

まくいかないといった状況が生じると、柔軟に対処することができなかった。「実験の結果が出ないのに、できると言ってしまった」、「周り」と自分を比較してしまう」と自らを振り返っている。自我理想と相容れない現実と直面したときには、その現実からひきこもることで自己愛をまもろうとしてきた。「ちょっと失敗してめげるのが早い」、「辛くなったら逃げる」と高い自我理想の破綻がひきこもりとなって現れていた。

プライドは高いが、課題を達成できず、自信を失い、劣等感を感じると、困難な状況を回避し、電話にも出ないし郵便も読まないひきこもり状態になって自己愛の傷つきを避けようとした。自我理想と現実が乖離し、自己愛が傷つけられそうになった。自我理想と現実を統合することができず、高いプライドと駄目な自分という矛盾した二つの側面を抱えたままであった。自我理想の修正は容易ではない。「何かをやりたいという気持ちはあるが、それが何か良く分からない」と語っている。

2年留年し、3度のひきこもり経験した。カウンセリングを通して、受験期に形成された高い自我理想は徐々に修正され、「何が一番つらいか」といって、自分は大したことないのに、周りの人がそう思わないこと」と自ら語るようになった。現実の等身大の自分を受け容れることができるようになり、現実的な社会参加に向かうことができた。

諏訪ら¹⁴⁾は「一次性ひきこもり」として報告した事例の特徴として5つの項目を挙げている。1)「戦わずして負ける」というエピソード、2)「あるべき自分」という理想像の温存、3)その「理想像」への両親の備給、4)自らの欲望による理想像の弱さ、5)他者による評価を守るための回避を中心とした行動原理、の5つである。「一次性ひきこもり」として取り出された事例の特徴は「あるべき自分」あるいは「高い理想像」への強いこだわりが中心的問題になっている点、それが自立への前進を障害

している点において破綻型に共通の問題性を持っている。もはや有効ではない自我理想への固執が青年期後期の発達を妨げている。これは単に本人の問題というだけでなく、それまでに青年を導いた自我理想そのものが内包する問題でもある。現代のわが国が子どもにどのような自我理想の形成を促しているのか、その自我理想の発展の可能性どうかといった問題についても問われるべきであろう。

2. 未成熟型

自我理想は青年の自己愛を社会的目標に向ける働きをしている。自己愛の満足を求めて自我理想に向かって努力することが青年に与えられた課題である。ところが、自我理想に向かう欲求が認められない、あるいは少なくとも表面には現れない青年がいる。

青年に期待される自我理想のあり方は、社会の一員として社会から評価され、社会的価値観の達成を通して自己愛の満足を得ようとすることであろう。ところがそのような将来の自立に向かう目標となる自我理想を追求しているようには見えない学生がいる。彼らからは自我理想を担い追求する主体としての意識があまり感じられない。青年期的な将来設計を持っていないし、自立の課題についての意識も不明確である。将来を強く意識している様子がない。

将来の職業の選択の問題やそのための現在の課題などの問題が、現実的レベルでの悩みとしてはまだ現れていない。自分の社会的立場についての当事者意識が弱く、本人には社会が目の前の問題として現れていない。自立に向かう意欲が乏しく、自立し一任前になることへの意欲や、社会人となり責任を負い、自由に主体的に生きることへの自覚が認められない。自我理想の形成が弱く、本人の動機が社会に向かわず、いまだに個人的世界の中で自己愛を満たそうとしている。

事例1のひきこもりのきっかけは第三者から見るとそれほど大きな出来事ではない。レポー

トが書けなかったことは、ひきこもりの重大性に比べると小さな出来事のように見える。学校に行けない理由について、本人は第3者的に語るがそれを解決しようとする意気込みは感じられない。将来や現状に対する焦りは認められず、自己評価に関する葛藤も見せない。将来についてはあまり考えてないという。破綻型のように、自我理想に強くこだわってきたという特徴は見られない。目標は不明確であり、青年期的課題に対する主体的取り組みの弱さが特徴である。

事例2は、高校時代はただ受験勉強だけをやってきて、対人関係や社会的経験が極めて乏しく、大学生活の多様性に全く対処できなかった。次第に大学に足が向かなくなり、ひきこもってしまった。彼の現在の第一の目標は大学生活に適應することである。大学生活を通して将来像をどのように形成し、どのように自立を実現して行くのかはまだ全く考えられない。それ以前の課題で精一杯である。授業に出席し、単位をとることが先ず目標になっている。対人関係の経験の乏しさと社会参加に対する意識の弱さが目立っている。自我理想は不明確であり、青年期的な自我理想の形成が先ず必要である。

鍋田¹²⁾はひきこもり事例が抱えている問題について、明確な自我理想が認められず、自己同一性の障害に通じる自己感覚のあいまいさがあると指摘している。これを鍋田は自己像やライフスタイルの形成不全と考えている。この鍋田の指摘は未成熟型に重なるものである。

3. 未定型

破綻型でも未成熟型でもない。未定型は破綻型や未成熟型に比べて主体性の成熟が認められ、青年期的課題も自覚している。したがって、現状についての自らの問題を客観視して語るができる。しかし明確な目的意識がなく、勉強の意欲が乏しい。「やる気がない、興味あることがない、将来については考えていない」という事例や、「就職も大学に残るのも嫌、自

信がない」あるいは「将来の目的が不明、やる気が出ない、授業に興味がない」といった訴えが認められた。

受験をめざしていた時期の自我理想はすでに有効性を失っている。破綻型は自我理想に強迫的こだわりを見せていたが、未定型の学生は破綻型ほど過去の自我理想に強い執着は見せていない。したがって受験勉強を支えた自我理想の喪失に対して破綻型のように大きな衝撃は受けていない。しかし新たな自我理想は形成されていない。将来への明確な方向性を持っていないため、現在の課題をやり通す気力や困難を乗り越える力が出ない。自我理想が未定のみままであり、その結果青年期の自我同一性獲得のための行動全般に目的意識が乏しく、強い意欲が出ない状態にある。

事例1は特に大きなきっかけはないままに、ひきこもりを始めている。相談室では明確に自分の意見を述べ、自分の現状について自ら分析することができる。大学生としての自覚もあり、将来について考えてもいる。しかしまだこれというものをつかんではいない。自我理想が明確ではない。自己の将来像は形成されておらず、現在と将来とが明確に繋がっていない。青年を導き、後押しする自我理想が形成されていないために、大学生活への強い動機が生じない状態である。

事例2は中等度群に属している。専門科目への興味が乏しく、勉強への意欲があまり出ないと言う。対人関係の悩みがある。自分中心のあり方を修正して社会に適応できるかどうかの問題であると自ら述べている。社会参加の必要性を意識し、適応できるかどうかを悩んでいる。自己中心的で頑固な自分が大人の社会に参加できるのかどうか、自分が目指すべき自我理想が定まらない状態にある。何を目標にして努力するのか、将来に対してどのような自己像を描くのか、悩みは職業的アイデンティティだけでなく、対人関係の中での自分のあり方、自分中心の考え方にまで及んでいる。

3) 現代の青年の自我理想について

ひきこもりが見られる青年を自我理想という視点から3つの型に分けて検討した。社会活動はその活動の中に何らかの価値を認めて、その価値の獲得を自分の目標とし、その活動を通して自己愛を満足させようとするところに成立する。自我理想は自己愛と社会的要請とを満たす形で形成されるものである。ひきこもりの学生は自分のあるべき具体的目標を描くことができていなかった。自我理想をもてない状態にあった。自分の目標とする自我理想がある青年は、具体的な行動において明確な目標をもつことができる。自我理想は青年に社会とのかかわりに意欲をもたせ、課題を達成していくための力を与える。

青年の自我理想は社会とのかかわりの中で作られる。現代の大学生のもつ自我理想はどのようなものであろうか。現代の大学生の自我理想の成立とその追求の過程には現代の青年期の特徴が現れていると同時に、現代の青年期が直面している困難な問題もまた現れている。

現代の大学生は幼少時から勉強によって自分の将来が決まると教えられ、長年にわたる受験勉強を経験して大学に入学してきた。大学受験が最終目的ではなく、大学を卒業した後に社会参加するための一つの過程であることは理解しているはずであるが、実際には大学入学までの人生において大学受験が具体的で唯一の目標であり、大学に合格することは疑いのない価値を持つと考えてきた。

学生たちは大学に合格することが最も重要であるという価値観の下で過ごしてきた。価値とそれへ到達する方法が固定されているという意味において、管理的な環境の中で生活を送っている。良い成績をとることで自分の社会的価値を獲得し、周囲に認められる自分であることを理想にすることが当然であった。その目的のために多くの時間を費やし、他の欲求を犠牲にしてきた学生がいる。彼らは禁欲的・強迫的

生き方は受験勉強に専念している間は、真面目、優等生として評価され適応的である。勉強以外のことを犠牲にする生き方を通して自我理想を実現しようと努力してきた。

自我理想は、単に知的に構成されるものではなく、自己愛に方向を与えるものであり、人間の最も深い欲求と結びついている。自我理想は個人が「かく在りたい」と描く自己像であり、個人の生活に方向性を与える指針である。

大学は社会に出て一人前になるために社会的な価値観と自己愛を最終的に結びつける作業を行う場所になっている。しかし個人の人生の基盤を形成する自我理想に修正や変更が生じる過程は容易には進まない。大学に合格することが自我理想と結びついていた若者には大学入学後に、次の自我理想の獲得が求められる。

生活の目標を示し、意味を与え、若者に希望や意欲を与える自我理想が曖昧なとき、自分の将来像は不明確となり、生活全般に目的意識が薄れ、意欲が低下する。あるいはそれまで確固たる自我理想をもち、それに全生活を賭けていた若者が、その自我理想の破綻を体験したとき、彼は生活の指針を失い自分がどうあるべきかを見失うことになる。

また、青年に求められる自我理想（社会の中で役割を担う）を形成し、担うだけの主体の成熟がなされていない若者は、自己をさらに成熟させる時間を必要としている。

成熟への歩みの停滞、遅れは従来より報告されてきた。ひきこもりと関連のあるこれらの問題との関係について検討する。

4) キャンパス精神医学的視点

campus psychiatry からひきこもりを照射してみることは、大学生のひきこもりに働く心理について一定の理解を得るために欠かせない作業である。大学入学までに学生を導いていた自我理想は受験勉強に適応するためのものであった。大学入試を最大の目的として高校までの生活を送ってきた学生は大学入試とともに

にそれまでの大きな目標を失うことになり、大学入学後に、多少にかかわらず一種の価値観の空白を体験する。大学生活は新しい価値観の下で行われる必要がある。現代の大学は青年に価値観の再検討、再構築の場を与えている。しかし新しい自我理想の形成はたやすいことではない。新たな自我理想獲得の失敗は、大学生活の挫折や自己コントロール喪失へと繋がる危険性を秘めている。

① 退行

大学生活における目標や意欲の喪失、課題達成の困難、自己コントロールの破綻から退却・退行へと向かう事例がある。年齢相応の社会的機能を果たすことができず、社会活動から逃避し、社会を回避する状態に陥る。しかし、このような退行は必ずしもネガティブな意味だけを持っているとは限らない。村瀬¹⁾は退行しながらの自己確立を青年期の一つの可能性としてあげている。ピーター・ブロス³⁾は発達を前進と後退（退行）との交替として捉え、青年期における退行の積極的役割に着目している。「こころの旅をさすらうことも青年に許された貴重な機会であり、退行的な状況はまさに自分を自力で治していくための絶好の機会となる」と村瀬は述べている。退行的な状況の中で自己変革が生じる可能性を青年は持っている。

青年にかかる圧力は青年の前進を止め、時間を逆行させる。ひきこもっているとき、社会の流れから自分だけがとりのこされるという不安が生じる。青年はこの退行を逆に創造のための時期として役立てる力を持っているとはいえ、常にうまくいくわけではない。ポジティブなメカニズムが機能せず、停滞が慢性化してしまうのがひきこもりである。

② 学生相談

将来が見えない不安に耐えながら、自分の新しい目標を見つけるという課題は重く、ひきこもった状態でこの新たな課題を一人で乗り切

ることは容易ではない。自力でひきこもりから脱出する者もいるが、ひきこもった状態から脱出するきっかけをつかむことができず、不安の増大に対して社会との接触を避けることで自分を守ろうとする悪循環に陥る場合もある。やはりひきこもりの青年に対して外から働きかける要素が必要である。学生相談もそのような働きかけの一つであり、学生が新たな目標を見出す過程を手助けしている。

本稿で示した、破綻型2例、未成熟型2例、未定型2例の各事例は学生相談に通いやがてひきこもりから脱却し学校に戻っている。その間半年から長いもので2年の年月を要した。カウンセリングはかれらが自分について語る場を提供し、自己認識を深め、新たな方向を見出すことを援助した。カウンセラーとの会話の中で、学生は次第に現在の状態を冷静にみつめることができるようになり、やがて現実的な目標を見出し、大学に復帰していった。

ひきこもりの状態を否定的にしか見ることができず、自信を喪失していた学生は、カウンセリングにおいて、自分の話を聞いてくれて、自分の気持ちを理解してくれる人間関係を得ることができた。自分を非難せずに認めてくれる相手との間で、自分について語り考える余裕が生まれた。カウンセラーは本人の言動の中に将来につながる可能性を見出してそれを本人に伝えるようにした。

学生は過去の自分について振り返り、問題点を語るできるようになった。自己認識が進み、今後自分に必要なことから、目標について次第に考えを進めていくことができた。新しい自我理想をカウンセラーが与えたり、あるいは新しい自我理想に誘導することはできないが、学生が自分の考えを進めていくための触媒としてその過程に働きかける役割を果たすことはできた。

学生の内的成熟の過程は、それを可能にする時間と相手が必要である。大学においては個人カウンセリングが支援の方法として存在して

いる。大学以外の場所では、グループ活動もまた自己の成長を進める体験を与えてくれる。仲間が存在が不安をうけとめる力を与えてくれる。孤立感から解放され、新しいモデルを見出すなど様々な効果が期待される。

③ 対人恐怖症（森田神経質）

対人恐怖（森田神経質）とひきこもりの違いについて検討してみたい。周囲に対する緊張、集団が怖いといった他人への過敏さが高度に認められ、また集団や学校が強い圧迫感を感じさせているという点において、ひきこもりと対人恐怖症は共通の特徴を持っている。鍋田¹²⁾は対人恐怖症の特徴について次のように述べている。対人恐怖症は明確な自我理想をもって、あるべき自分の姿を目指していながら、現実の自己像がその理想像に達していないことで自分を非難し、劣等感をもち、だめな自分を他人の視線にさらすことを恐れている。自我理想と現実が乖離していることに葛藤がある。これに対して、ひきこもりでは明確な自我理想が認められず、自己像形成の曖昧さがあると鍋田は指摘している。ひきこもり青年においては自我理想が形成されていないという問題が指摘されている。

本調査においてひきこもりの大学生の自我理想について検討し3類型に分類したが、いずれの型も自我理想をもっていない状態にあった。

対人恐怖症（森田神経質）には自我理想と自己像の落差から生じる葛藤があり、葛藤を悩む意識とエネルギーがひきこもりよりも強い。本調査対象に見られた社会恐怖の特徴は、自我理想をもてず、具体的な目標がないために社会とのかかわりを失っている状態から生じていた。森田神経質のもつ強力性から生じる葛藤とは異なっていた。ひきこもりからの脱出の過程は、現実的で実現可能な自我理想の形成の過程でもあると考えられる。

④ スチューデント・アパシー

青年期後期の世代における学業の不達成、大学生の怠学を説明する有力な概念のひとつがスチューデント・アパシーである。ウォルターズ¹⁵⁾はスチューデント・アパシーの心理的背景として、成功した強い父親、未熟な青年を非難する父親の存在を指摘している。社会参加の段階での自信のなさ、逡巡や躊躇が主要な心理的要因と考えられている。現象としては大学生の不登校であるが、スチューデント・アパシーは小学校、中学校、高等学校の不登校とは同一には論じられない大学生世代特有の特徴をもった概念と考えられてきた。

単に学校場面への適応の問題だけでなく、実社会参入を前提にした競争、社会人として自分の前に立ちふさがる父親像の克服といった青年期後期特有の発達上の問題の表れであると考えられた。部分的退却という行動上の特徴を持っている。学業には意欲を示さないが、アルバイトやサークルや趣味の活動はむしろ熱心に行う。本業である学業は休んでも、他の活動は行っている。本業での勝負を恐れて回避しようとしており、そのために部分的撤退が生じていると理解されている。学業達成へのこだわり、勝負への過敏さ、社会参加への恐れという特徴をもっている。

スチューデン・トアパシーと「ひきこもり」はどちらも学業からの撤退という共通項を有している。しかし「ひきこもり」は明らかにスチューデン・トアパシーとは異なった特性をしめしている。スチューデン・トアパシーは本業以外の分野では活動性を示している。趣味やアルバイトには積極的に関与していく。「ひきこもり」はそのような部分的な社会活動は認められず、全面的撤退と言ってよい。社会的自己確立の課題に対する立場にも明らかに違いがある。

スチューデン・トアパシーの基盤には社会に出ることの困難という壁があり、そこで進むことができず立ち止まっている状態である。「ひきこもり」も同じく社会に出る困難という壁に

ぶつかっているが、その場に立ち続けるのではなく、その壁から離れて退いた状態にある。現場から退いていることが、さらにひきこもりを強化する二次的な要因となって悪循環を形成している。

ウォルターズが最初に記述したスチューデント・アパシーは社会参加の課題への強い意識と、その課題からの退却という明確な葛藤構造を持っていた。スチューデント・アパシーのように葛藤に基づく病理が成立するためには、葛藤を生み出す基盤が必要である。葛藤は明確な価値観をもち、その価値観の実践に対する強い自覚を持つ者が、その価値観のが実現が困難な状況において生じる。対人恐怖は対人関係における個人としての自己の評価についての葛藤であったのに対して、スチューデント・アパシーでは、社会的に参入する自己の価値に関する葛藤が主題となっている。このような典型的なスチューデント・アパシー像は本調査における「ひきこもり群」よりも「中等群」あるいは「軽度群」に近く、また「破綻型」や「未成熟型」ではなく「未定型」に近い。

選択的退却を示しているスチューデン・トアパシーは現象としてはまだひきこもりのように完全な撤退状態には陥っていない。山田¹⁶⁾は選択的退却だけでなく、スチューデン・トアパシーの完全退却もあり両者は連続していると指摘している。この完全退却は「ひきこもり」にかさなる概念である。

「ひきこもり」にしてもスチューデン・トアパシーにしても青年期の自己同一性確立の試みの停滞、挫折、破綻の一つの様態である。現象面で分類できたとしても、これらの青年期の問題の発達論的意味とそこから生じる社会的課題の停滞の様態、そして病理については別個に論じることはできない。

Erikson, H. ⁴⁾ の「同一性拡散 identity diffusion」概念は青年期の困難について特徴を記述し論じている。エリクソンが同一性形成過程の障害として記載した6つの病態は以下の通

りである²⁾。

1. 過剰な同一性意識、
2. 選択の回避と孤立感・空虚感・麻痺
3. 対人的かかわり合いの拒否と孤立、
4. 時間的展望の拡散、
5. 勤勉さの拡散、
6. 否定的同一性の選択である。

小此木は^{1,3)}この病態について「いろいろな同一化を試みたり、アイデンティティ選択のゲームを楽しんだりする自我の活力が失われ、いつになっても自己定義を回避する選択麻痺の状態に陥る。人と親密になるとのみ込まれる不安が起こり、対人的な距離のとり方が失調し、未来に対する希望や展望が失われる。生活全体の緩慢化、絶望感、無気力が生じ、どんな社会的活動からひきこもってしまう。特に職業的アイデンティティの獲得を回避し、自分の主観的な世界へのひきこもりが生じ、また他方では、仕事、学習、社会性などの能力をもつ以前の幼穉的段階への退行なども起こる場合がある。」と述べている。

同一性拡散の病態はひきこもりにも当てはまる内容を持っている。同一性拡散の基本的な問題として挙げられているアイデンティティ選択の活動は青年の活動を導く自我理想によって支えられている。青年期にふさわしい自我理想の発達があった青年においてはアイデンティティ選択の活動は積極的に行われると考えられる。そのためには思春期や青年期前期中期の社会的体験の豊かさや深さが必要である。

まとめ

1) 表に全 39 例の DSM-IV に準拠した診断を示した。診断がついた事例が 21 例中 DSM-IV 診断に該当しない事例が 18 例であった。診断がついた 21 例は、回避性パーソナリティ障害 4 例、気分障害 3 例、社会恐怖 3 例、摂食障害 2 例、シゾイドパーソナリティ障害 1 例、適応障害 9 例であった (1 例は重複診断)。

2) 診断がついた 21 例中、医療機関を受診

したのは 5 例 (気分障害 2 例、摂食障害 2 例、適応障害 1 例) であり約 25% に過ぎなかった。

3) 「ひきこもり群」13 例中、診断がついた事例は 9 例 (69%)、診断なし 4 例で、その内訳はパーソナリティ障害 2 例、社会恐怖 1 例、適応障害 6 例であった。特に適応障害が多いのが特徴的であった。

4) 「ひきこもり群」で診断のついた 9 例について、ひきこもりの始まった時期と病状が出現した時期について検討したところ、9 例のすべてにおいてひきこもりと病状は同時進行的に出現していた。何らかの病状が先行してあとからひきこもりが出現した事例は認められなかった。

5) 各事例の自我理想の様態について面接の内容、面接時の態度から判定し、「未定型」(明確な自我理想がなく、目標を持って困難を乗り越えることができない)、「破綻型」(熱心に追求してきた自我理想が破綻した状態)、「未成熟型」(自我理想を担う主体の弱さ)に 3 分することができた。「ひきこもり群」では「未定型」5 例、「破綻型」4 例、「未成熟型」4 例であった。

6) campus psychiatry の視点からひきこもりについて論じた。

参考文献

- 1) American Psychiatry Association: Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders, Fourth Edition; DSM-IV American Psychiatric Association, Washington D.C. 1994
- 2) 馬場謙一: 自我同一性の形成と危機 - E.H. エリクソンの青年期論をめぐって 笠原嘉, 清水将之, 伊藤克彦編: 青年の精神病理 金剛出版
- 3) Blos, P: On adolescence. (野沢栄司訳: 青年期の精神医学. 誠信書房, 東京, 1971)
- 4) Erikson E.H.: Identity and the Life Cycle.

- International University Press, 1959 : 小此木啓吾訳編「自我同一性」誠心書房, 東京, 1973
- 5) Glen, O.G. : Psychodynamic Psychiatry in Clinical Practice. American Psychiatric Press Inc., Washington D.C., 1994 : 舘哲朗監訳 : 精神力動的精神医学—その臨床実践 (DSM-IV版) — 岩崎学術出版, 東京, 1997
- 6) 井上洋一 : 大人になることの不安 ころの科学 44: 85-89, 1992.
- 7) 井上洋一, 水田一郎, 小川朝生: 適応障害. 精神科治療学 16:339-343, 2001
- 8) 伊藤順一郎, 吉田光爾, 小林清香ほか : 「社会的ひきこもり」に関する相談・援助状況実態調査報告. 厚生労働科学研究, ころの健康科学研究事業, 「地域精神保健活動における介入のあり方に関する研究」(主任研究者: 伊藤順一郎) 総合研究報告書 2003 『平成14年度厚生労働科学研究費補助金心の健康科学研究事業, 地域精神保健活動における介入のあり方に関する研究—10代・20代を中心とした「ひきこもり」をめぐる地域精神保健活動のガイドライン(最終版)』2003
- 9) 近藤直司 : ひきこもりケースの現状と精神医学的理解. 近藤直司, 長谷川俊雄編 : 青年のひきこもり. 萌文社 10-45, 1999
- 10) 近藤直司 : 青年期のひきこもりをめぐる臨床研究の課題 2005年度版・児童心理学の進歩(金子書房), 東京, 2005
- 11) 村瀬孝雄 : 退行しながらの自己確立 笠原嘉, 山田和夫編「キャンパスの症状群」 pp209-232, 弘文堂, 東京, 1981
- 12) 鍋田恭孝 : ひきこもりと不全型神経症 精神医学 45:247-253, 2003
- 13) 小此木啓吾 : ひきこもりの社会心理的背景 狩野力八郎, 近藤直司編 : 青年のひきこもり pp13-26, 岩崎学術出版, 東京, 2000) 出版, 東京, 2004
- 14) 諏訪真美, 鈴木國文 : 「一次性ひきこもり」の精神病理学的特徴 g. 精神神経誌 104(12) ; 1228-1241, 2002
- 15) Walters, P. A. : Student Apathy. In “Emotional problems of the student” (Eds. G. B. Blaine & C. C. McArthur), Appleton Century Crafts, New York, 1961
- 16) 山田和夫 : スチューデント・アパシーの基本病理—長期縦断的観察の60例から (平井富雄監修) 『現代人の心理と病理』 355-373, サイエンス社, 1987
- 17) 山本誠一 : 超自我・自我理想 久世敏雄, 齊藤耕二編 : 青年心理学事典 p173 福村出版, 東京 2000
- F. 健康危険情報
なし
- H. 知的財産権の出願・登録状況
なし

高等学校不登校・保健室登校・中途退学の事例研究

—社会的ひきこもりを視野に入れた養護教諭による調査より—

分担研究者 北村陽英

奈良教育大学・教育学部・学校保健研究室

研究要旨

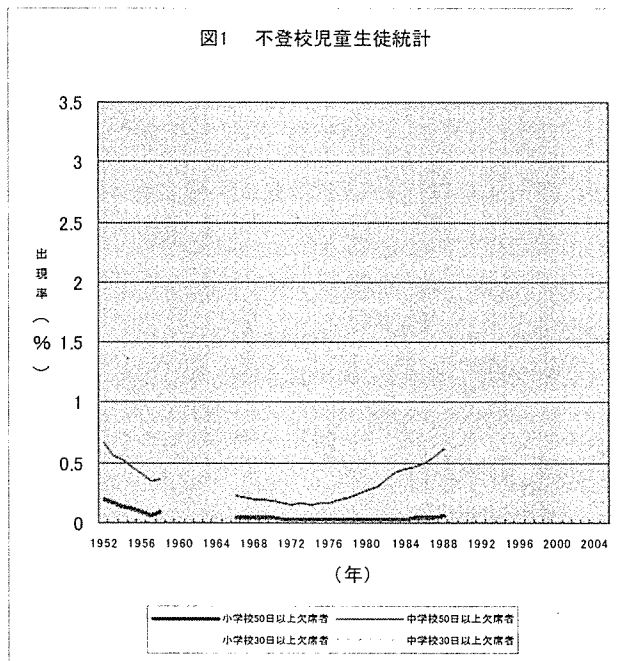
保健所ひきこもり相談において、過去の不登校歴が45%、最終学歴が高校中途退学が31%を占めるという。高校不登校が続き、転学や高校中途退学となり、以後はひきこもりとなっている例が多くいると予想される。高校生徒が高校在学中に不登校となり、どのような経緯をたどって、転校あるいは中途退学、さらにはひきこもりになるのか、2004年度の17,211名の内、ひきこもりがちな不登校、中途退学等の生徒について116例の事例報告を養護教諭から得て、在校中及び2005年8月までの経過を検討した。不登校の始まりは高校以前が20%、高校1年次が最も多く51%、次いで高校2年が19%であった。転学と退学は1,2年次に多く、3年次は不登校、転学、退学数は少なくなっていた。このことは、不登校生徒の多くが1,2年次に中途退学や転学しており、3年次までは在籍していない傾向が強いことを示していると考えられる。不登校の理由は対人関係が多く、家庭内事情は保護者不在が33%、家族からの重圧が21%を占めた。病名・症状名が判明した例は7例のみで、摂食障害、うつ、リストカットが比較的多く見られた。2005年度に入ってから5ヶ月間の経過では、退学31%、転学21%、治療中22%、回復傾向23%、完全復帰4%であった。転学後の様子が不明であるが、退学生徒は元来ひきこもりがちな高校不登校であったことから考えても、ひきこもりがちな高校不登校生徒の経過状況は良好とはいえない。不登校の各種類型の内、無気力型不登校が、高校不登校、中途退学、そして家庭にひきこもる恐れが強いと考えられる。

A. はじめに

1. 不登校の推移

(1) 小・中学校時の不登校

文部科学省による小学校・中学校を対象とした不登校児童生徒統計の1996年から2005年までの間について、その出現率を図1に



※出現率…全児童に対する不登校生徒の割合

表した。尚、不登校日数については1996年から1990年までは年間の出席すべき日数のうち50日以上欠席した者、1991年から2005年は30日以上欠席したもののデータである(1)。

小・中学校の不登校は、1970年代に最低率を示したが、その後急激に増加し、小・中学校不登校は2000～2002年に最高率を示し、以後は増加傾向に歯止めがかかっている。

(2) 高等学校の不登校

高等学校は義務教育ではないためか、その不登校統計は見あたらなかった。しかし、文部科学省は2005年9月22日に2004(平成16)年度「生徒指導上の諸問題の現状」をまとめ(2)、今回初めて高校での不登校生徒数を調査した。続いて2005年度について同結果が公表された(3,4)。その結果国公立全体で高等学校不登校生徒は67,500人(1.82%、2005年度;59,416人、1.65%)いることが分かった。また、不登校生徒のうち、36.6%(2005年度;36.8%)が中退しており、不登校がそのまま高等学校中途退学に結びつきやすいことが明確になった。また、2004年度長期欠席高校生110,287人中、中学校時代に長期欠席の経験があったことが確認された生徒は26,540人(24.1%)であった。高等学校不登校となった直接のきっかけとして、最も多いのは本人にかかわる問題(33.9%)、友人関係をめぐる問題(12.4%)で、次いで学業不振(12.0%)、入学・転編入学、進級時の不適応(6.3%)、病気による欠席(5.0%)、親子関係をめぐる問題(4.6%)等が多く認められた。不登校状態が継続している理由は、無気力(25.1%)が最も多く、次いで不安など情緒的混乱(21.8%)、あそび・非行(12.1%)、が多く見られ